

2023年1月

課題本 『少年と犬』

馳 星周/著 文藝春秋 2020年

◆◆◆1月の読書会から

先日 2023年1月19日、第168回直木賞(2022年下半期)の結果が発表されました。今月の課題本は、第163回直木賞受賞作品『少年と犬』です。「直木賞は、大衆性を押さえ各新聞・雑誌・単行本として発表された長編小説作品あるいは、短編集に与えられる文学賞」です。今月の課題本の作者は、馳星周です。

今月の当番さんは、27年前に馳星周の本に出会い「暗黒の世界」を描いた作家としてのイメージが残ったそうです。すっかり忘れていたその作家の作品が課題本となり、しかも直木賞受賞作品だったことを知り1月の課題本の当番に立候補したそうです。この本に関してというよりも作品のバックボーンとなる作者の情報をたくさん提供してもらいました。作者を知ること、さらに読みを深めることができたように思います。

作者の経歴から馳氏自身が見聞きしたことの事実が作品の構成にも表れていること。また少年と犬がどのように繋がっていくのか、犬好きの作者だからこそ犬を軸に展開したのだろうけれど「なぜ犬なの？」と考え、「犬派」「猫派」の話など盛りだくさんの話でした。様々の人間を登場させながら次第にテーマに迫っていく作品に隠された「しかけ」も探っていました。

今回もそれぞれの思いを共有し、「自分では掴まない作家の本」を土台に語らうことができました。
(文責:世話係)

読書会を終えて

吉川五百枝

見失った繋がりを求めて旅をする「犬」が登場しました。「多聞」という名で。

犬は、オオカミを原種にして、人間と共に生きる動物に作り変えられたのだとか。人間との触れ合いがあつての犬ですが、人間も犬に触れられて作り変えられるのかもしれませんが。

我が家にも犬がそばに居ますので、動作や表情、鳴き方でその反応が少しは想像できると思っています。この作品の「多聞」という名の「犬」は、シェパードと和犬のミックスということですが、「賢い犬」だと登場人物のみんなから言われているだけあって、〈賢く勇敢 愛情深い 誇り高い むやみに唸らない 辛抱強い 躰が行き届いている 超然とした目〉などの称讃の言葉が散りばめられ、これだけの賢い要素を詰め込まれた犬は、どんな具体的な時間を重ねるのだろうかという興味をもちました。

「多聞」が出会い、しばらく共に暮らした人々は、〈ある男・泥棒・夫婦・娼婦・老人・少年〉と章立てされています。

「多聞」が出会ったこれらの人達は何だったのか、結論を最後に持ってくる構成では、本を閉じた後、もう一度、出会った人達のことを考えなければなりません。

もちろん小説だから虚構です。

今月は、例会を欠席したので、他の方の考えを聞かせていただく機会がありませんでした。それで、自分が小説を読むとき、何を考えているかを改めてまとめてみることにしました。つまり、“一人でボケ”て、“一人でツッコミ”を入れるというふんです。

もともと小説は虚構であるという約束事があるので、日時や場所、秩序、人物や事情も作り事、つまりウソ事にかまいません。

小説は、《虚構のリアリティ》が主軸になるのだとよく言われます。

虚(ウソ)の世界を創って描く事で、実在の見えにくいホントを顕らかにしようとする世界が小説だと思います。構成世界は虚であっても、中で描かれることには、リアリティ(実在感・迫真性)が求められます。そのウソの世界で、現実の作者の内的実在的真実が具体的に語られます。それが、あの「多聞」が関わりを持った人達でしょう。

内的真実と言われるリアリティは、具体化すると、作者の感性なので表現は様々です。今回は、「犬」がふれあう人間の言葉で表現されるので、虚実一体と楽しめる人もあるでしょうが、生理的に犬の嫌いな人もあります。小説は実体の犬への好悪ではなく、「犬」も別世界の虚であり、作者の胸の内に動く「内的真実」という「何か」は、「多聞」と人間の摩擦熱となって見えるのがリアリティの中身だと思います。

今回のように虚の世界であるとは言いながら、多くの人がよく知っている犬のことなので、正確な犬の動作の描写をこころがけたでしょう。

「こういう知ってる」「こんなことする」などと理解されると同時に、「多聞」に触れられて揺れる人間の心情のリアリティを描くために、作者はさまざまな生活場面を切り取って1幕6場を構成しました。

最初の「ある男」は、東北大震災後に迷い犬のような「多聞」を連れ帰った中垣和正。被災地に入った外人の窃盗団の運び役ですが、逃走途中で自動車事故を起こし死亡。「多聞」は、中垣との暮らしの中で、認知症の老いた母親に快活さや穏やかさを贈りました。それが、周りの人の幸せ感の回復につながっています。

窃盗団の1人ミゲルが、「多聞」を泥棒稼業の守り神にするのが第2場で、子どもの頃、野良犬と暮らしたミケルに過去を思い出させ、自由にしてもらいます。

3番目の出会いは、中山大貴と妻の紗英。大貴のトレイルランニングの山道であった「多聞」は、熊を追い払う手柄で夫妻に飼われます。「多聞」を妻が呼ぶ時は「クリント」で、夫は「トンバ」。離婚を躊躇って刺々しくなって居る夫婦の傍に居て、心の底からの笑いをもたらす感謝されます。大貴は山道から滑落死。妻の紗英によって放たれた「多聞」が第4場であったのは殺人を犯した娼婦の美羽でした。デートクラブに所属する24歳です。傍に居るだけで心を温め笑顔にする「レオ」こと「多聞」は、舐めて清めてくれるのです。傍らにいればこそその体の温もりでも、人間どうしの縛りは慰められませんでした。美羽は自首する前に、恋しい家族を探せと「多聞」を放し、次の旅を可能にしてやりました。

第5場の出会いは猟銃と生きる猟師の弥一です。老いて今は温もりが要る身。「ノリツネ」と名付けられた「多聞」は、孤独を癒やし死を見届ける存在として現れます。誤射され独り死

んで行く弥一の頬を舐めて看取ったあと、離れていきました。

最後の場は、内村徹と妻久子が釜石で震災にあった傷を語ります。その恐怖からか、3歳の息子の光は、しゃべらない笑わない泣かない怒らない子どもになり、一家はその恐怖を避けて熊本に移住。内村が、怪我をし栄養失調の「多聞」を家に連れ帰ったとき、それまで外部を遮断していたような光が破顔。「多聞」に触れる光の笑顔は家の中を明るくしていきました。釜石から熊本まで5年かかった「多聞」の旅の行程が、最初の「あの男」から「弥一」までの物語であったと知らされます。

釜石の震災の津波で元の飼い主の出口春子は死亡。震災前に、内村の母と光が出口春子の連れた「多聞」と遊んでいたという情報が入りました。やがて熊本地震。家屋倒壊にあった光は、覆い被さった「多聞」に守られていました。命をかけてくれた「多聞」に〈無償の愛〉を感じる内村夫妻でした。光は、「多聞」が死んでも、「ずっと光と一緒にいるからね」と、自分の胸を指す事ができました。

虚構の中で、作者のリアリティは「多聞」という虚の犬の旅が人間の愚かさや寂しさ哀しさを観察し、慰めや愛を希求せずには居れない弱い実在を露わにするものでした。同時に、「多聞」のような「何か」の実在も示唆していると感じます。「多聞」との死別を受け入れる光が、証明出来なくても「多聞」は今も「在る」と言うのです。

作者のリアリティ(内的実在)が、読者と共有できるかどうか。

昨日、愛犬が亡くなったと知らせて来た友人と話しました。「多聞」を読んでいる友人は、言いました。

『「多聞」は光クンの胸の内に今もいる。うちのワンちゃんもそうです』と。

『少年と犬』を読んで

◆【 YA 】

犬は昔から人と生活を共にし又生活の一部を担っている。盲導犬、災害救助犬、セラピー犬、警察犬、牧羊犬そして猟犬等々多方面で活躍している。

飼い主と多聞と名付けられた犬、そして3才の男の子の光の家族と会う度に親しくなり、いつの間にか、多聞と光の間には大人では持ちあえないような、犬と子どもの間に、幼いが強い絆が生まれ育っていたのだろう。

あの日が突然襲った。東北の太平洋岸に壊滅的な大地震が起こり、ドス黒い海水は生き物のように堤防を越え、数万人の命を呑み込み、一瞬のうちに、そこに暮らしていた人々の生活を消してしまった。そして世界を震撼とさせた原発の爆発が起こり、放射能が広範囲に蔓延し人々のこれまでの生活や営みを終わらせた。想像を絶する苦しみが続いている。

多聞は飼い主を失い、そこから多聞の何故か南に向けての旅が始まる。

汚れた痩せ細った多聞の、何かに惹き付けられた人々に助けられ旅を続けるが、手助けしてくれた人が、相次いで亡くなることには、違和感があったが、そうで無いと多聞の旅が続かないのだろう。

そして凡そ5年後、釜石から熊本まで長い長い道のりを辿り着いたのが、8歳になっていた

光の元だった。

光の家族は大震災で生活の全てを失い、熊本に新天地を求めて移住して来ていたのだった。光は震災のショックか、言葉を発することが殆ど出来なかったが、多聞との生活で徐々に明るくなり、言葉も甦っていった。幸せな生活も続かなかった。

釜石から移って5年後、熊本では大地震が起これ多くの人々が亡くなり、壊滅的な町もあった。光の家も押しつぶされ、地震が収まった時、光の体に覆いかぶさった多聞に梁が刺さり、多聞は死んでいた。こうして光は命をとりとめた。

犬はこのような行動を、実際にもとることが出来るのだろう。

原発に今までは恩恵を蒙っていたが、現実には世界でも最悪の原発事故の一つと言われ、10年以上経った今でも、数万人の人が長い人生を営んできたふる里に帰れず、仮設住宅での生活を強いられていることに、作者は今の原発に頼る生活に、警鐘を鳴らして居るのではと思う。

日本は地形的に地震からは逃れることは出来ない。数年後には、南海大地震が来るのではとも言われている。原発に頼る生活は愚かな選択ではないかと、強く思う。

◆【 TK 】

以前にも犬が好きなので読んだことがあり、今回二回目を、読みました。犬なのでほのぼのとした小説と思いきや、飼い主がことごとく死んでいくのです。幸運どころか死神みたいな犬です。

しかし、どんな犯罪をおかしている飼い主にしても、癒されたり、犬に愛情を注いだり、人間の良さを引き出していく犬なのでした。

さらに名前が多聞と言ってまわりのいうことを察知して理解を示しているイメージで描かれています。

今、ペットブームですが、この小説は、犬目線で人間を観察しているようです。ペットロスで悲しんでいる人は多くいますが、犬からみて飼い主が死んでいく悲しさを描いているのかもしれない。

震災とか不景気で生きにくい世の中ですが、もっと他に仕事があるでしょ？と感じました。

神様が愚かな人間のために与えた動物かもしれないと書いてありましたが素直になって勇氣とか許しを与えるきっかけになっています。

インターネットでずるい人間と弱い人間についてありましたが、犬と人間は当てはまるかもしれません。ずるい人は都合の良いような人を探したがって生きています。弱い人間は受け入れてほしいためにへらへら笑って寂しいためにずるい人を受け入れて腐れ縁みたいに一緒に生きるという内容でした。

知性をもっている人間はしゃべらず、忠実で餌を求めている犬を思うように飼い慣らしているのかもしれない。

しかし犬も賢い所もあり元の飼い主とか出会った人、方角を覚えているのでした。

東北と熊本の震災を縦糸で紡いでいく小説でした。

この本は最後の章が最初の方から発表されていたみたいですが、最後から逆に読んでみるのも面白いかもしれません。

◆【 T 】

光と多聞が初めて出会ったのは、光3才・多聞1才の時だった。釜石の公園で出会ったときから彼らの間には強い絆が結ばれ、信頼し合う仲間となった。

多聞の一番最初の信頼する人は飼い主の春子さんだが、春子さんは津波に流されてしまった。飼い主を失った多聞は、飼い主以外で一番好きだった光を探して熊本に向かって旅立つ。犬やオオカミは群れで生活する生き物で一人では生きていけない。多聞は熊本に向かう方々で仲間を見つけ、そこで出会った人たちに大きな影響を与え、また別れた人たちからたくさんの思いを受け取りながら光に近づいていった。

窃盗団の手伝いをしていた「男」の和正や窃盗をしていた「泥棒」のミゲルは、多聞と暮らすことで、すさんでいた気持ちが穏やかになり、家族を思いやったり新しい生活に踏み出す勇気をもったりした。

夫大貴との生活に疲れ、元気のなくなっていた「夫婦」の紗英は、多聞と出会い、大貴がいなくても生きていく元気を取り戻した。「これからも、ばりばり働きますから。」という言葉から彼女の決意が伝わる。「娼婦」の美羽は、多聞と出会い、「お前に会えてよかった。どん底の人生でそれが最高な出来事。一緒にいる間本当に幸せだった。」と言って多聞と別れた。多聞から勇気もらい警察に自首し人生をやり直したのではなかろうか。

「老人」の弥一は、癌で余命わずかだった。妻を亡くし、一人娘の美佐子との関係も途絶えていたが多聞との生活の中で、娘との関係も改善していった。

熊本に行くまでいろいろな人たちと生活し、美羽の言っていたように「人を笑顔にする。そばにいただけで勇気と愛をくれる。」多聞であったが、別れた人たちからのメッセージも受け取って光のもとへ運んで行ったのではないだろうか。

津波に巻き込まれた春子さんからは、もっともっと生きたい。命は大切にというメッセージを。和正やミゲル・美羽・弥一からは、家族の温かさ、家族の大切さを、そして、出会った人たちみんなから、前を向き歩いていく勇気と元気を。

多聞と出会った光は元気を取り戻し明るくなった。多聞は亡くなるときに、今まで出会った人たちから受け取った様々なメッセージ・気持ちを光に渡して逝ったのではないかな。

多聞って仏様みたい。寄り添うことで、悪事を働いている人・絶望の中にいる人の心の中の固い固い殻に包まれていた小さな良心や温かい心を思い起こさせ、再生の手助けをしているようだ。

◆【 N2 】

2011年3月11日に起こった、東日本大震災はマグニチュード9.0、規模は世界で4番目の大きさであり、行方不明者も多く未だに被害状況の全容は把握されていないのだが、震災の3ヶ月を過ぎた6月20日時点では死者約1万5千人、行方不明者約7千5百人、負傷者約5千4百人と記録され、5年後の2016年調査では、女川漁港で14.8mの津波の痕跡が観測され、遡上高は国内観測史上で最大の40.5mが観測された。今この記録を再確認するとなんと多くの命が失われたのかと愕然とするのだが、更にその後の2016年4月14日と16日の熊本地震では死者211名、重傷者1142名、軽傷者1,604名と多数の方が災害に見舞われたのである。

この作品は六つの物語で構成され、2011年の災害半年後の初秋の仙台で始まり2016年の熊本地震での多聞の死で了となっている。その5年の間に多聞は光の移住先を目指して、石巻から、新潟、富山、福井、島根と歩き続け、それぞれの場所で飼い主とめぐり会い、時を過ごし、物語を作り、死を看取り、そして最後に光と再会し、熊本地震で光を守って自身の命を落としてしまった。しかし多聞の死を知った光が言うように、「命が失われ大切な人の姿は見えなくなってしまっても自分の胸の中には生き続けている」という思いは残された者の実感であろう。

この本を読むと震災の思いが蘇り、災害はいつでも起こりうるし、人との別れの時もいつ来るか解らないということに改めて思い至った。

◆【 K子 】

計算してみると27年前に初めて馳星周さんの「不夜城」を知りました。

暗黒小説、まさにブラック・黒・の世界を題材にした作品でした。

作者31歳 一般小説作家としてのデビューでした。それから私の頭の中からすっかり消えていました。それがナント、1月の読書会の課題本として登場。しかも163回直木賞受賞作品『少年と犬』です。エ～直木賞にあんなブラックを得意とする作家が…直木賞の基準は？大衆小説であること。芥川賞の純文学・短編とは線引きがしてありました。(納得)

作品の内容は6話からなっています。どの編もとても読みやすく「犬」が主人公(?)なのです。犬好きの人には特にたまらない小説だと思います。

(おまけ)作者も犬・犬・犬の”犬好き” 飼い犬のために軽井沢に別荘を購入し、犬の死後は軽井沢へ転居して、ブログで近況を報告する生活をしているそうです。

犬の名前は「多門」=毘沙門天からきています。名付け親は東北の震災で死亡。この子犬が5年かけて「宮城」→「新潟」→「富山」→「大津」→「島根」→「熊本」とめぐり巡ります。「多門」の役割は常にかかわってくれた人達の(温もり)・(救い)・(慈悲)・(鎮魂)・(希望)だったのです。

(ビックリマーク)主要人物が5人死ぬのです(結構残酷な死に方) 多門は最後です。

構成は「東北大震災」で1歳の多門が飼い犬と別れ(この時光と言う幼児とも)6歳になった多門が熊本大地震で光と再会するのです。

光は前の震災から心が折れたままの少年になっていました。が 多門によって心の平穏をと

りもどしていきます。多門の6年間の役割もジ・エンドです。私には多くの仕掛の内に深く考えさせられることの多くある作品でした。

◆【 望月悦子 】

作家の「しかけ」を探るのが、小説を読む妙味だと友人は言います。今迄そういう視点で小説を読んだことがなかったので驚きました。そこで、今回はその視点で『少年と犬』の「しかけ」を見つけることにしました。

作者は、2011.3.11 の東北大震災の災害から、作家として被災者たちに何ができるのだろうかと考えたのではないのでしょうか。さらに追い打ちをかけるように 2016.4.14 熊本地震災害、この本が出版されたのが、2020. 5.15。それまでに 6 編の連作短編として世に出していますが、そこでは「少年と犬」を筆頭に「男と犬」「泥棒と犬」と連作を次々と出版しています。

それぞれ短編の背景は、作者の犬好きと大学時代新宿ゴールデン街のバー「深夜プラス1」でバーテンのアルバイト中の見聞や体験にあるように思いました。

そこでは、人間の弱さや醜さ、優しさを嫌とゆうほど観、聴きしたことから、作者自身人の善と悪、人間性、価値観などが構築されたのではないのでしょうか。それらを凝縮してこの短編は編纂されたのではないかと思いました。

それぞれの短編には、現在抱えている日本における今日の問題を取り上げています。「男と犬」では認知症の親の介護、「泥棒と犬」では移民の暗黒世界における問題、「夫婦と犬」では離婚寸前の夫婦の問題、「娼婦と犬」では同棲生活で経済力のない男女問題、「老人と犬」では老人の独居生活、「少年と犬」では大災害のトラウマからの精神疾患。これら短編からは、優しさ賢明さ愚かさ理不尽さなどをベースに展開されていることが読み取れます。また 6 編の内、主人公が死んでいないのは、「娼婦と犬」の「美羽」だけです。しかし彼女も事件を起こし犬から離れていきます。今回の課題本は、連作短編の一番初めに出版された「少年と犬」を最後にまとめています。これが作者の「しかけ」で、主張を明確にするために 6 編の短編を整理してまとめたのではないか。「死」と「離別」に意味を持たせ死が新たな生を生み出すという「死と再生」の物語に仕上げているのだと。毎回登場する多聞は「傷つき、くたびれ、飢えている」状態で別の人に出会え新たな共感と希望をもたせています。作者は、3.11 の東北大震災、5,15 の熊本大地震の鎮魂歌として被災者にエールを贈っているのだと思います。死者の魂の安息を祈るためのレクレイムではなく、死者の魂を慰め、鎮めるための鎮魂歌だと考えます。最期に、少年の母親の久子が「あの多聞よ。死んだからって光を見捨てるわけがない(P304)」また、多聞の気持ちを代弁させるかのように光に「大丈夫だよ。光。僕はずっと光と一緒にいるからね。だから何も心配することはないんだって。死んだからって、多聞が居なくなったわけじゃあないんだよ」と言わせています。この思いが今まで心の中にあつたわだかまりを一気に解消することになったのだと。鎮魂はカタルシスによって浄化されたのです。これこそが作者の仕掛けからの答だと考えます。だから、課題本のように「少年と犬」が最後に組み替えられないとカタルシスと鎮魂が読者に訴えられないと思いました。私の読みとりもそうであったように。

他にも、小さな「しかけ」を多々見つけました。犬の名前として「多聞」とは珍しい。これは作者

の意図で、仏教の「多聞天」は四天王のひとりで「良く聞くもところの者」と祀られている思想を利用したのではないかと。犬の多聞は言葉を発することはできないけれど、相手の気持ちを読み取りいつも寄り添っています。生きづらい人間を慰め共感し、優しさを彼らから引き出しています。この「優しさ」が作者の「しかけ」で、多聞を開放し「再生」に繋げていく展開になっているのだと。短編では多様な境遇の被災者たちを想定して描き、「死」は残された人たちの「再生」に繋げ、立ち上がってほしいという作者のエールに違いありません。

砂原浩太郎原作の『高瀬庄左衛門御留書』の1節に、強訴に関する裁きを待つ時(冤罪になりかけている時)の主人公の心情が脳裏をかすめました。「野山を歩き風に吹かれますと、おのれの中の溜まった澱(カタルシス)が掻き消えます。どろどろしたものが空や地に流されてゆく。あの心地よさは他に代えがたいものにござります。どろどろはじきにまた溜まりますが。それもまたいずれ野に消える。そうと分かっているゆえ、辛抱がかないます。そのようにして一年一年が過ぎてゆきます」という箇所です。

また、別の「しかけ」 犬は野生オオカミの祖先種であると分類されていますが、人間の手によって作りだされた動物群(イエイヌ)となり、今日では家族の犬として互助関係を築いています。多聞に付けられていたマイクロチップで元の飼い主が判明し、多聞との温かい家族としての関係や近所の人からの情報によって幼かったときの光との関わりも見えてきました。エドモント・デ・アミーチス原作『母を訪ねて 3000 里』と多聞が光を捜し求めていくストーリーが重なります。どちらも幼い時のたっぷりの愛情の中で養育されたことが基本的信頼関係を築き、それが原動力となって探し求めるという行為に繋がっています。この課題本の「しかけ」から探し当てた内容は、「人を救うのは『愛』である」と読み解きました。作者との出会いは、この本が初めてなので純粋な気持ちで、その上温かい気持ちで読み終えることができました。

◆ 【 MM 】

6つの短編から成る一匹の犬をめぐる物語。1章の「男と犬」から物語の展開がうまく、はまって読んだ。最終章の「少年と犬」では悲しい気持ちと温かい気持ちの両方がこみあげてきた。

1章「男と犬」→家族のために強盗の手助けをする男(和正)と犬(多聞)の物語。舞台は仙台(宮城県)。仲間のミゲルに多聞を盗まれ、和正は死ぬところで終わる。

2章「泥棒と犬」→窃盗団のミゲルと犬(タモン)の物語。舞台は郡山(福島県)。新潟を目指す。ミゲルの死の直前タモンはリードを放され自由になる。

3章「夫婦と犬」→大貴と紗英と犬の物語。舞台は富山県。大貴は拾ってきた犬をダンバと呼び紗英はクリントと呼ぶ。大貴は山で滑落して死亡。犬は大貴と一緒にいたがリードをつけずに行動していたため行方はわからなくなった。

4章「娼婦と犬」→美羽と犬(レオ)の物語。舞台は滋賀県。犬との出会いは殺した彼を埋めるために入った山だ。最後は、自首する美羽はできるだけ西に移動し犬を山に放つ。

5章「老人と犬」→猟師を引退した弥一と犬(ノリツネ)の物語。舞台は島根県。山の中で熊と間違えられて他の猟師に撃たれてしまう。犬は行方がわからなくなった。

6章「少年と犬」→光と犬(多聞)の物語。舞台は熊本県。

犬は移動しながら様々人と出会う。その時々で名前も違う。犬に埋め込まれているマイクロチップに気づいた人は犬の名前や元々飼われていた場所を知り驚く。岩手→宮城→福島→富山→島根→熊本…。光に会うためにここまで…。光と再会するまでもたくさんの人を助け癒してきた。賢い犬だ。言葉を話せないだけで、人間の言う事は理解している。犬に助けられたから登場人物も犬が行きたいところに行かせてやりたいと思ったのだろう。「そばに置いておきたいのはやまやまだが犬には行きたいところがあるようだ」犬の気持ちを尊重して放す人もいれば命尽きて離れる人もいた。

岩手で東日本大震災に遭い熊本で熊本地震を経験する。5年の間会いたいという一心で多聞は生きてきたのだろう。それぞれの短編と時間と距離と災害といろんなことが重なり複雑な気持ちになった。「少年と犬」は小説だが現実にはここまでの距離とはいかなくても同じような経験をした人と動物の物語はあるだろうなと思った。

犬といつも一緒にあったのは身近な人の死。最終章の多聞の死後、光の言葉が印象に残った。

「死んだからって多聞がいなくなったわけじゃないんだよ」多聞も同じことを思っていたらどうか。肉体としてはいなくなるけども心の中にはいる。存在は感じられる。

人との別れも辛くて寂しいがいつかこういう風に感じられる時がくるだろうか。そう思える時を待とうと感じさせる一冊だった。